



The social imaginary arche in ontological philosophy by Cornelius Castoriadis: Dimensions of imagination in social institutions and scientific praxis

RODIS FOTIOS

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2023-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8210号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008210>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目

The social imaginary arche in ontological philosophy by Cornelius Castoriadis:
Dimensions of imagination in social institutions and scientific praxis

(コルネリウス・カストリアディスの存在論的哲学における社会的構想力的アルケー
——社会制度と科学の実践における構想力の諸次元——)

氏 名 : RODIS FOTIOS

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 松田毅 教授
(副) 中真生 教授
(副) 大橋完太郎 准教授

本論文は、創造的構想力と社会的構想力についての主要な哲学者、コルネリウス・カストリアディスが示した社会的構想力の存在論のもとで社会制度や科学の実践にアプローチし、社会的構想力的アルケーを人間の固有の世界(the human Eigenwelt)という概念や科学の哲学と融合させることを目的としている。

第1章では、上述の理論に関するトピックに先立ち、観察可能な自然的実在(natural reality)と観察可能ではない自然的実在との区別を通して、科学的対象の特定を試みる。観察できない現象は、現代の物理学から得られるものであり、かつ、存在論の哲学の歴史に由来するもので、数学的には存在するものの、科学的実験や経験的观察によっては直接認識することができない自然的実在の一部となるものである。このように、科学的実践の場に混沌とした要素を組み込むことで、観察可能でないものは、科学理論を自然的実在の一部にのみ局所的に適用できるものとし、そして、それを本質的には不完全なものにし、自らの適用可能性の基盤を自分自身では説明できないようにする。したがって、科学的な記述を少なくとも準完全なもの(*quasi complete*)にするために構想力が働くのは次のような試みにおいてなのである。すなわち、混沌とした領域にまたがり、欠けている科学的な基礎の代わりに、形而上学的でありながら科学的でもある前提として機能する公理——論理的に導出されたものではなく、構想力によって認められた公理——で置き換えようとする試みにおいてなのである。

この結論が第2章につながる。ここでは、カストリアディス自身の同時期の理論に基づく構想力の概念が展開される。根源的に創造的で(radically creative)、かつ社会的・歴史的な(social-historical)次元の重要性を強調することで、構想力の創出(instituting)が、人間が生きるための条件、その集団的存在の比類のない能力にまで高められる。単独の個人のレベル、精神分析の範囲で、カストリアディスが採用しているのは次のような移行である。すなわち、社会化——人間の初期の状態が、社会的・歴史的領域との接触によって破られ、モナドの状態を保持したまま、その主体として現れること——を通しての心理的モナドから社会的個人への移行である。この二元的な存在論が構想力を導入するのは、精神にとつての根源的なもの、個人にとつての社会的なものという、均衡を保つ次元の両方に対する共通の参照点としてである。このようにして与えられた構想力によって、物理学の領域と共存し、その社会的・歴史的な次元と結びつく、独立した存在論的な分野としての形而上学の領域に関する議論が開始される。

第3章では、無からの創造が、創造的な社会的構想力の容器(vessel)であることが明らかにされる。伝統的な哲学が反対のことを言っているにもかかわらず、根源的な創造の存在論的な道標となるのは、存在論的な系列の鍵である時間とともに、最初の混沌とした要素である。その意味で、創造は根源的な他者性の形式をとっており、それによれば、過去の影響から新しい影響が生み出されることはない。なぜなら、影響はその都度出現するのであり、たとえ過去の事例から生まれたとしても、その過去の事例と完全に関連付けることはできないために、これらの系列はいかなる合理

的な関係にも従わないからである。それにもかかわらず、創造は厳密かつ多元的な制約を受ける。なぜなら、創造は無からであるにもかかわらず、無とともにあるのでも無の中にあるのでもないからである。そのような制約には、外部的なもの、内部的なもの、歴史的なもの、内在的なものがある。このように考えてみると、存在論的な諸形象は、それらのアルケーとの合理的なつながりも、決定可能なつながりもたない。一方、新しい形象が出現するための諸条件は、確かに必要ではあるが、決して十分ではない。

第4章では、いかなる社会も自らに課している答えのない存在論的な問いに対して答えを与えることを目指す社会的構想力の使命について論じた。これらの答えは、社会制度 (social institutions) によって象徴される社会的構想力の意味作用 (social imaginary significations) によって与えられる。それにもかかわらず、社会的構想力の意味作用は、準有限で、非論理的な、そうでなければ、不完全で恣意的な根拠をもつ。さらに、創出された (instituted) 社会的意味作用は、二元的な存在論によって特徴づけられる。すなわち、創出された社会的意味作用は、集合論的・同一性的な (ensemblistic-identitary) 次元と構想力の次元とを具現化しているのである。この二元的なメカニズムの特徴をよく表している例が言語であり、この存在論をもとに、カストリアディスは、チョムスキーとチョムスキーの「普遍文法」の理論に異を唱えるのである。

第5章では、補足的に、存在論的哲学の主要な潮流によって伝統的に理解されてきた構想力の概念について、カストリアディスによる社会的構想力と弁証法的に比較しながら、歴史的に回顧する。まず、構想力の誕生は、古代ギリシャの時代に、アリストテレスの「ファンタシア」の理解の中に位置づけられる。ファンタシアは、最初は感覚とよく似たもの (the doublet) とされるが、その後、人間の知性による論理的推論の前提として認められる。第二に、近代初期にライプニッツが、人間の推論が主に経験的な知覚を伴わない思考に基づいていることを示すために、「盲目の思考」という概念を導入した。最後に、近代のロマン主義の時代に、カントは構想力を「産出的構想力 produktive Einbildungskraft」の内に再び導入した。すなわち、経験的な側面と超越論的な側面をもち、ある対象が直観の中に存在しなくてもそれを表現する力をもつ能力の内に再び導入したのである。カストリアディスが特に興味を持ったのは、カントが最後の『批判』の中で、想像力が創造的であることに言及しているにもかかわらず、その特徴をさらに詳しく説明していないという事実である。

さらに第6章では、これらの社会的構想力の意味作用が、生物としての人間とその環境との関係とともに、社会的・歴史的な層の上に人間固有の世界を形成する。人間固有の世界は普遍的なものではなく、それぞれの社会に応じて明確に区別されている。人間固有の世界の重要性は、社会的個人の知覚にあり、その知覚のための感覚入力はずばり個人的な経験として得られるが、直ちにそれぞれの固有の世界に存在する社会的構想力の意味作用によって意味を与えられる、つまり「彩られる」のである。したがって、本論文では、人間の固有世界によってその個人の感覚器官に

刻まれる能力がその感性を規定する限り、自然的実在は社会的・歴史的な姿の中に投影されると結論づける。

本論文の第7章では、創造的構想力の概念を科学の実践と結びつけるために、科学の公理の形成における構想力の役割を指摘する。カストリアディスは、自然的実在の本質を明らかにするために、第一の自然の層の概念を採用した。それは、一方ではどの生物によっても局所的に組織化されているが、他方では混沌としていて異質なものであり、全体としては組織化できないことを意味している。とはいえ、科学の公理の存在論について、ポアンカレはいかなる科学的記述も経験的なものと規約的な—非経験的な—ものとの二つの絡み合った次元を同時に表現していると主張した。後者について彼は、経験的には証明されていないが科学理論の準完全性 (quasi-completeness) のための基礎として最も適した部分だと非恣意的に選ばれた科学理論の部分を表現するために、「規約 (convention)」という言葉を考案した。この考えは、科学の実践についてのカストリアディスの見解、すなわち、公理は構想力の産物ではあるが、その非恣意性を集同的な (ensidic) 特徴として保持しているという見解と対応している。したがって、本論文では、科学の公理は、科学の実践の発展のための存在論的アルケーである形而上学的なテーゼを具現化していると結論づける。

これらの主張に基づいて、最後の第8章では、科学の実践における社会的構想力のアルケーに関する問題を明らかにする。ここでは、科学の公理が、創出された (instituted) 社会的意味作用であり、同じ構想力の要素によって生じたものであることが示唆される。社会的構想力が、第一の自然の層から同一性・集合論的な論理 (the identitary-ensemblist logic) を抽出した後、科学の実践は社会的・歴史的な次元を付与される。その次元は科学の実践をそれぞれの人間に固有の世界にとって多様なものにする。その意味で、いかなる科学的推論 (syllogism) の始まりにも、社会的構想力というアルケーが存在し、その結果、社会的構想力の意味作用が、創出された科学の公理としての役割を果たしているのである。このような主張から、カストリアディスは、科学の歴史が、科学的な世界理論 (scientific world-theories) の系列につながる創造的な断絶の連続で構成されている一方、社会的個人とその創造的な潜在能力は、その固有の世界によって与えられる方向性のもとで、科学的実在に対して唯一可能な「知る主体 (knowing subject)」となると主張している。

論文審査の結果の要旨

氏 名	RODIS FOTIOS
論 文 題 目	The social imaginary arche in ontological philosophy by Cornelius Castoriadis:Dimensions of imagination in social institutions and scientific praxis (コルネリウス・カストリアディスの存在論的哲学における社会的構想力のアルケー——社会制度と科学の実践における構想力の諸次元——)
要 旨	本論文は科学実践の存在論に、ギリシャに生まれ20 世紀フランスで活動した社会哲学者カストリアディスの構想力論からアプローチし、その全体像を描き出し、独自の科学論を哲学的にも位置づけようとした意欲作である。世界的に見ても希少な試みである。 現代のカストリアディス研究の現状を導入後、第3 章は論文全体を貫く主題として、科学理論の限界づけの存在論的基礎を論じる。自然的実在を観察可能なものと観察不可能なものに区別し、後者が特に現代物理学で対象になる点に注目する。同時に数学的には存在するが、実験や観察では直接認識できない自然的実在——混沌——を語る存在論の歴史を参照する。ガリレオの方法論に鑑みても、理論は自然的実在に局所的にしか適用ない点で不完全であり、適用可能性の基礎は説明できない。そこで科学の記述を「擬似的に完全」にする構想力の役割を認める。論理でなく、構想力がそこが混沌に関わり、公理——形而上学的かつ科学的な前提——を指定するという論文全体の主張を述べる。哲学史解釈には改善の余地があるが、構想力論と科学哲学の関連を明確に問題提起した点は評価できる。 第4 章はカストリアディスの構想力の概念の展開である。構想力が根源的に創造的で社会的歴史的次元を有する点を、フロイドらの精神分析の観点から人間の生存条件、集団的存在を高める社会化の機制に即して叙述する。個人が社会や歴史と接触し、個体のままで主体となる「心理的モナドから社会的個人へ」の移行過程である。構想力のこの二元性が、根源的なものと社会的なもの、双方の均衡を保つ参照点となる。その結果、カストリアディスの形而上学は、自然（科）学の領域と共存しつつ、構想力の社会的・歴史的次元を志向する独立した存在論となる。社会化のより具体的な叙述が求められるが、カストリアディス解釈にとって重要な二元性の論点を打ち出した点は評価できる。 第5 章は構想力の形而上学の観点から「無からの創造」が根源的「他者性」の形式をとる点を論じる。「無からの創造」を語る伝統に対し、混沌と時間を鍵とする「根源的創造」における社会的構想力の姿を描く。カストリアディスによれば、新しい形象はそのつど出現し、過去の事例から生まれた場合でも、過去だけに関連づけられうものではない。新しい形象を厳密かつ多面的に制約する、(生物的なものを含む) 外的自然、内的心理、歴史、意味的整合性が必要となるが、それで十分ということではない。それらには「アルケー」との合理的で決定可能な繋がりがないと考えるからである。「無」の存在様相をより明確にするべきであるが、論文がこの繋がり欠如にカストリアディスの哲学における無からの創造と他者性の意味を浮き彫りにした点は評価できる。 第6 章は社会的構想力の使命を論じる。社会がなにか「答えのない存在論的問い」に応答するとき、それは働く。その意味作用が社会制度を象徴し、答えを与えるが、論文の解釈では、この意味作用の根拠は「言わば有限」で論理的ではない、ないし不完全で恣意的にとどまる。また、構想力が(制度的に) 創出する社会的意味作用を特徴づけるのは、「集合論と同一性」の次元と構想力の次元の二元性である。社会的意味作用にはこの二側面が伴う。言語は、その機構の特徴をよく表す例である。集合論と同一性の論理的次元に関わる、構文能力の生得性ないし根源性の論点について、論理や言語の哲学研究として十分に意を尽くしたと言えない面もあるが、カストリアディスが、独自の言語の存在論から、チョムスキーの「普遍文法」の理論に異を唱える意義を解明した点は評価できる。 第7 章は哲学の伝統とカストリアディスの構想力概念に関する、影響作用史的観点からの補論的考察である。まず、構想力の誕生をアリストテレスの「ファンタシア」論に位置づける。ファンタシアは感覚とよく似たものとされたが、
主査記載 氏名（自署）	松田 毅

その後、人間の知性による論理的推論の前提として認められることになった。第二に、近代初期にライブニッツが、推論が主に経験的知覚を伴わない思考に基づいていることを示すため「盲目的思考」の概念を導入した点に触れる。最後に、カントによる構想力の「産出的構想力」としての再導入を論じる。それは対象が感性的直観には与えられない場合でも、それを表現する超越論的能力である。盲目的思考と「集合論と同一性」、天才と根源的構想力の関係など、掘り下げが足りない点もあるが、『判断力批判』が創造的想像力の特徴を詳論しなかったことが、カストリアディスの根源的かつ社会的な構想力論の独創性を考えるうえで重要である点を示した点は評価できる。

第8 章は社会的構想力の人間存在論である。バレーラの理論などに依拠して、意味作用は人間に固有の世界を形成するが、それが人間=生物とその環境との関係、社会と歴史を基盤にする点を論じる。各社会にそれぞれ固有の世界があるのは、感覚入力が個人の経験として与えられるとしても、それは固有世界に浸透する社会的構想力の意味作用によって意味付与、つまり「彩られる」からである。この点で現象学の一人称的アプローチを批判したうえで、人間の多様な固有世界が個人の感覚器官に刻みつける能力が、感性を規定する限り、科学理論が志向する、自然的実在も社会的・歴史的な像に投影されると結論づけるカストリアディスの認識論の理路を示した点は評価できる。

第9 章は公理形成に果たす構想力の機能を論じて、創造的構想力と科学実践を結びつける。カストリアディスは、自然的実在を論じるため「自然の第一の層」の概念を用いる。生物はこの層を局所的には組織化できるが、その混沌かつ異質な全体は組織化できない。この状況でポアンカレとカストリアディスの公理論を関連づける。ポアンカレは、理論的記述が経験事象と経験的でない規約から成る、二つの存在次元を同時に表現すると主張したが、「規約」は、経験的に証明されないが、理論を「言わば完全にする基礎」を表す言葉であった。それは、最適だが恣意的でない仕方では選ばれる理論部分を表現する。これが科学実践に関するカストリアディスの見解に対応すると論文は主張する。この見解でも、公理は構想力の産物だが、恣意的でなく「集合論と同一性」の特徴を保持すると考えられるからである。ポアンカレの規約主義を十全に論じ尽くしたとは言えないが、構想力が科学実践の存在論的アルケーである例を公理に見る理由は十分に示されたと言える。

以上を踏まえ、第10 章は科学実践のアルケーとしての社会的構想力を位置づける。まず、この構想力が自然の第一の層から同一性と集合の論理を抽出した後、科学実践に社会的・歴史的次元が付与される点を説明する。この次元が各固有世界で行われる科学の実践を多様にすること。つまり、あらゆる科学的推論の始原に社会的構想力が存在し、その意味作用が制度的に創出される科学の公理の役割を果たす点を敷衍する。カストリアディスが、物理学史に即して、理論が創造的断絶の連続から構成される一方、固有世界に方向づけられながらも、創造的潜在能力をもつ社会化された個人こそが科学的実在に対する唯一可能な「知る主体」であると主張する理由を論じる。科学と数学の哲学から見れば、さらに解明すべき点もあるが、カストリアディスの観点から科学の普遍性、「真理」、無限論も扱い、論文は社会的構想力の哲学者としてのカストリアディスの独自の意義をその根底から示したものとして高く評価できる。

本審査委員会は、以上のことから全員一致で、論文提出者、RODIS FOTIOS が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名（自 署）	区 分	職 名	氏 名（自 署）
主 査	教授	松田 毅	副 査	教授	茶谷 直人
副 査	教授	中 真生	副 査	准教授	大橋 完太郎
副 査	講師	新川 拓哉			